

ハイスクールすぐ死ぬ 旧タイトル:駒王新横浜協奏曲

鳩胸な鴨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突然、『吸血鬼が一般的に認知されている世界』と『悪魔などの人外が秘密裏に動く世界』の『新横浜』が入れ替った。

※この小説は下品です。

本作は『吸血鬼すぐ死ぬ』の布教のために書いているので、興味を持つてもらえると幸いです。

本作は『吸血鬼すぐ死ぬ』が濃いため、『ハイスクールD×D』のイメージを損なう恐れがあります。

目次

新横浜のパニック

プロローグ「吸血鬼クロスオーバー大好き」	1
襲来、謎のバケモノ	7
悪魔	20
大パニック	25

新横浜のパニック プロローグ 「吸血鬼クロスオーバー大好き」

「お、終わった……」

新横浜にある、とある事務所。

その主たる人物：ロナルドは、パソコン画面を前に、倒れ込むように机に突っ伏した。

その画面に綴られた文字列の内容は、『ある存在との戦闘』を描いたものになっている。

ロナルドは腱鞘炎で痛む手で、その文字列を出版社のメールアドレスに送る。

「たっだいまー！終わったー？」

仕事疲れと達成感が入り乱れた感情の余韻に浸る暇もなく、細身の男が事務所の戸を開く。

ニコニコと笑う男の手には、新作ゲームの類が入ったビニール袋がぶら下がっていた。

「テメエ、終わった直後でよかったな。」

書いてる途中だったら、問答無用で殺して、テメエの塵を肥料にして農業始めてたわ」

「日を追うごとに死んだ私の活用法を見出すの、やめない？」

細身の男：『高等吸血鬼』ドラルクは、冷や汗を流しながらツツコミを入れる。

ロナルドは相手する気にもなれないのか、パソコンの電源を切り、ソファに寝そべった。

と、その時。ソファに置いてあったリモコンが、ロナルドが寝そべった勢いで飛び出す。

放物線を描いたソレは、ドラルクの足の小指に激突した。

「ぐはあっ!？」

瞬間。ドラルクの体は塵となった。

『死』を迎えたのだ。

死因は『リモコンの角が足の小指に激突した』という、非常に下らないものだったが。

ドラルクの死を目の当たりにしたロナルドは、その死骸に近づく。「相変わらず弱えな。リモコンくらい避ける」

「し、仕方ないだろう!? 私だってさっきのは予想外だったんだし!!」

ロナルドの声に反応するように、塵は再生を始め、ドラルクの形へと戻る。

そう。何を隠そう、この『ドラルク』という吸血鬼、『弱い』のだ。小学生にバカにされただけでも死ぬし、ゲームの音量がデカすぎても死ぬ。

イヤホンの感触が硬くても死ぬし、軽いチョップだけでも死ぬ。

すぐに復活はするものの、数秒も経たずにまた死ぬなど、日常茶飯事だ。

「追い出してエ……。でも、追い出したらロナ戦の続きが……」

ロナルドは頭を抱え、深いため息を吐いた。

彼は『吸血鬼に対抗する傭兵』：要するに『吸血鬼退治人』なる職に就いている。

激しい人気競争に勝ち残る手段として、自伝『ロナルドウォー戦記』を出版している作家としての顔も持つ。

ある仕事を引き受けた彼は、成り行きでドラルクと同居する羽目になってしまう。

追い出そうにも、ロナ戦……ロナルドウォー戦記の略……の人気の要たる存在となったドラルクを追い出せば、担当編集者に殺される。

そんなわけで、渋々と同居生活を続けているのだ。

「……う？あれ？そーいやジョンは？」

ロナルドが視線を右往左往させ、ある存在を探す。

ドラルクは気の毒そうな顔で彼の尻を指した。

恐る恐るロナルドが視線を向けると、そこには……。

「又っ……。ヌー……。っ」

ロナルドの尻に潰され、更にはソファに埋れて窒息寸前のアルマジロが居た。

「恥ずかしがることはない！」

我が股間の『クロスオーバー砲』から『クロスオーバー光線』を放ち、クロスオーバーさせるだけだ!!」

「そんなク ロ ス オ ー バ ー の 仕 方 は イ ヤ
だアアアアアアアアアアアアツツ!!!」

そんな自慰感覚でやられてたまるか!

ロナルドはそう叫ぼうとするものの、口から飛び出たのは隠すべき本心だった。

男のイチモツが迫るといいう極限状態により、彼の精神は限界を迎えていたのだ。

しかし、クロスオーバー大好きは嫌がられると燃えるタイプなのだろうか、その先端に名状し難き光を収束させ始める。

「さあいくぞークロスオーバーほほう!」

光が爆発しようとした、まさにその時。

茶色の丸い物体が、クロスオーバー大好きを吹き飛ばした。

華麗に着地したその物体…ジヨンは、ドヤ顔で二人にサムズアップする。

「ジヨ、ジヨオオオオオオoooooooooooo!!!今めっちゃヒーロー
だったぞジヨオオオオオオoooooooooooooooooooo!!!」

「よくやった、ジヨン!!今のうちに、この変態を追い出さぞ!!」

「テメエ終わった瞬間に再生しやがってその案賛成ださつさと運ぶぞ
オラアアアアアアoooooooooooo!!!」

滂沱の涙を流しながら、ジヨンに感謝を述べる二人。

倒れているクロスオーバー大好きを追い出そうと、二人はその足と頭を掴もうとする。

「あつ、やばつ。爆発する」

「はっ!!」

クロスオーバー大好きのそんな声が響く。
一体なんなのかと二人が首を傾げた、まさにその時。

新横浜は光に包まれた。

◆?◆?◆?◆?

ヨーロッパ圏にある、とある館にて。

優雅に紅茶を嗜む男性…ドラルクの父、『ドラウス』は、何気なしにテレビをつけた。

「なんか面白いのやってたっけなあ…?」

ドラウスがチャンネルを吟味していると、あるニュース番組に目が留まる。

「新横浜?何かあったのか…?」

テロップにある『新横浜』の字につられ、ドラウスはニュースに食らいつく。

テレビの画面には、変わらないようでいて、圧倒的に様変わりした新横浜が映っていた。

『なんとということでしょう!妙な光に包まれた直後、新横浜が変わってしまいました!』

これは一体、どういうことなのでしょうか!

ナン・モシラーネ博士!』

『知らね』

ニュースキャスターと白衣の男性のやり取りの傍ら、ドラウスは卒倒した。

襲来、謎のバケモノ

『新横浜の異変』から3日が過ぎた。

若干心配になるほどの速度で、世界は『新横浜が変わった世の中』に順応した。

なんでもロナルドたちの世界の神奈川県警のトップが、偶々妹に会いに来てたらしい。

そのため、騒動に巻き込まれ、混乱を鎮めるために警察本庁へと向かったのだとか。

『結果、吸血鬼のいない平和な世界の新横浜と入れ替わったことが判明。』

吸血鬼対策センターは、原因の吸血鬼を捕まえるも、「俺じゃ戻せん」と供述』……だって」

新横浜にて広く活動する情報誌を手に、ドラルクがロナルドに読み聞かせる。

ロナルドはというと、暇を持て余していたのか、ジョンと「だるまさんがころんだ」をして遊んでいた。

「だるまさんが……ころんだっ！」

「又っ！」

「君たち、聞いてた？」

「よし、もう一回行くぞー！」

「ヌー！」

「聞いてないなコレ」

完全に「だるまさんがころんだ」に夢中になっている二人に、ドラルクは呆れたため息を吐く。

同時にオーブンから「ビーっ！」という音が鳴り響いた。

「おやつ出来たから、そこまでにしたらっ？」

「そうだな。いやー、久々にやると面白いな！だるまさんがころんだ！」

「ヌーっ！」

「ロナルド君、こっちに来てから大分残念になったよねぶふうっ!」
ドラルクが小馬鹿にするように言うと、ロナルドの拳が腹に突き刺さる。

無論、ドラルクがその攻撃に耐え切れる筈もなく、あっさりということ切れた。

「誰が残念だコラ。テメエも年がら年中ゲームやって引きこもってた残念だろうが」

「いや、いい歳して仕事中に『だるまさんがころんだ』に熱中する人に言われたくないんだけど」

「うっ……」

言い返す言葉がないのか、言葉に詰まるロナルド。

と、その時。床の一部がパカリと開いた。

「おい、ロナルド」

そこから現れたのは、まだ少しあどけなさの残る少女だった。

ロナルドは開いた床になんの反応も示さず、その少女に向き直る。

「ヒナイチか。そろそろおやつだから、来ると思ったぜ」

「おお！今日はなんだ!?!」

「ヒナイチ君も、こっち来てから完全にただおやつをたかりに来る人だよ」

いつの間にやら皿に盛り付けたフィナンシエの山を手に、ヒナイチの隣にしゃがみ込むドラルク。

ヒナイチは一心不乱にそれを頬張りながら、口をモゴモゴと動かした。

彼女は警察に設けられた、吸血鬼が起こす事件を担当する『吸血鬼対策課』の一人である。

元々は超エリートだったのだが、ドラルクとの出会いにより、その道を順調に転がり落ちている最中である。

「ひふはひゅうふえふひっほいはははふひふはへへは」

「ほふはほは?」

「はは。ひはほへはひふはへへふ」

「ほひやは、ほへはひほへはふはは」

「口にモノ入れながら会話しない……って意味通じてんの!?!」

口にフィナンシエを、これまたたつぷりと頬張りながらの会話。

以前ならロナルドがツツコミを入れていたはずなのだが、何故か意味が通じ合っているらしく、会話を続ける始末。

二人は頬いっぱいフィナンシエが入ったまま、ドラルクに手を伸ばした。

「ひゆふひゆふ」

「いや、なんて?」

「ひゆふひゆふ」

「せめて飲み込んでから言ってくんない? なんなの? なにか欲しいモノでもあるの?」

「ひゆふひゆふ」

「……牛乳?」

「ふふ」

ニュアンスからなんとなく聞き取ったが、「牛乳」で正解だったようだ。

まるで全く話の通じないクレーム客と話しているような、なんとも言えない不快感。

ドラルクはこめかみに青筋を浮かべながら、冷蔵庫からパックの牛乳を取り出し、二つのコップに注いだ。

「ほらー」

ドラルクが二人にソレを渡すと、二人はコップを呷り、牛乳を飲み干す。

口の中のフィナンシエとともに飲み込んだのだろう。

二人は「ごくくんつ」と喉を鳴らした。

「そういうことだ。私は本部に戻る」

「おう、わかった」

「いや待って!?!話が全然見えないんだけど!?!」

ロナルドが手を振る傍ら、ドラルクが大声で帰ろうとするヒナイチを呼び止める。

「なんだ、聞いてなかったのかドラ公」

「聞いてなかったというより聞き取れなかったんだ!!」

あんな翻訳しろつっつたら、翻訳の人キレて監督に殴りかかるわってロナルド君はボケに回るな!!

私、基本はボケなんだぞ!？」

ドラルクの抗議が受け入れられたのか、ヒナイチは「やれやれ」と肩をすくめ、床から這い上がった。

「仕方ない。要点だけ話してやろう。」

新種の吸血鬼っぽいのが確認されてな。

また変なのだろうなって思ってたんだが、死傷者が出始めたことから、本気でヤバイヤツつてことが判明した。

既に退治人組合の方にも報告してある。

お前たちも気を付けろ……と言ったんだ」

「死傷者……?」

死傷者という言葉に反応したドラルクは、軽く小首を傾げた。

「おかしいな……。吸血鬼は基本、致死量は吸わないはずなんだが……」

「基本だろ? 吸い尽くす奴も居るんじゃないか? 脚高とか……」

「アレは超希な例外だ。人間だって、たまにとんでもない偏食家が居るだろ」

ドラルクはそう語ると、言葉を続けた。

「食事で人間を絶滅させたら、食糧が少なくなるって理由でこつちが困る。」

だから、吸血鬼の間では『吸い尽くす』という行為は……人間で言うなら……そうだな。

『ケツの穴に生花ぶち込みながら全裸でイナバウアーを披露する』ってレベルで恥ずかしい行為として浸透してる。

まあ、脚高みたいに守らん奴も、居るには居るが」

「よくわからんが、恥ずかしいってことだけはわかった」

人間なら黒歴史なんてモノじゃない。

吸血鬼にとって『血を吸い尽くす』という行為は、『末代どころか歴史の汚点として名を刻まれるレベルの恥』なのだろう。

そのことを理解したロナルドたちもまた、ドラルクと同じように首を傾げた。

「ヒナイチ、なんか聞いてるのか？」

「いや……。私も『死傷者が出た』としか聞かされてなくてな。

捕獲を試みた半田も、あっさりと返り討ちにされた」

「はあ!？」

半田とは、ロナルドの高校の同級生であり、吸血鬼対策センターの職員の一入である。

ヒナイチの同僚でもある彼は、『ダンピール』という吸血鬼と人間のハーフだ。

アスファルトを破壊し、落とし穴を掘る程の怪力を誇る彼が、あっさりと返り討ち。

半田の実力を知っているからこそ、二人は驚愕したのだ。

「大事にしていた母親からのバレンタインチョコを、戦いの途中で落とし、しかも自分で踏んでしまったらしくてな。

今は口も聞けないほどに落ち込んでる」

「ちよつとでも心配した俺がバカだった!」

相変わらずのマザコンぶりだった。

聞けば、母親に相当申し訳ない思いを抱いたのか、ブツブツと「お母さんごめんなさい」と繰り返してららしい。

たかが安物の、しかも2ヶ月も前の板チョコ。

しかも、母親からのバレンタインチョコ。

それだけでここまで落ち込めるとは、ある意味才能なのかもしれない。

こうも地面にぶち撒けられているということは、大怪我を負った者がいるということ。

つまりは、件の吸血鬼も、この近くに存在すると言うことだ。

「どっ、どうしよう……？」

ロナルド君に知らせ……いや、ヒナイチ君に直接報告したほうがいいのか……？」

極度の緊張で死にかけてるドラルクは、砂になりつつある手で携帯を取り出す。

ガタガタと震える拳句、砂になっているため、うまく画面がタップできない。

かれこれ5分ほど奮闘したドラルクは、なんとかロナルドへと電話を繋げた。

「も、もしもし……？」

『おっ、見つけたか？』

「いや、それっぽい痕跡はあったんだが……」

コレ、吸血鬼じゃなくて殺人鬼とかじゃないの？それくらい血がぶち撒けられてるし、同胞の匂いが微塵もしないんだけど」

吸血鬼は匂いで同胞を探すことができる。

しかし、地面に広がる赤の水たまりから発せられる匂いがカモフラージュになっているのか、ドラルクは同胞の匂いを感じ取れない。

こうなれば、吸血鬼か、はたまたイカレた人間かの区別もつかなくなる。

『は？吸血鬼じゃない？じゃあ、普通に警察案件か？』

「わからんが、私はもう帰るぞ。イカレ野郎だったら、私なんて格好の的だろう」

『捕まるなよ。捕まったら俺がフクマさんに殺される』

「私の心配じゃないのか……」

少しでも心配してくれていたのか、などという感動などなかった。ドラルクはがっくりと肩を落とす、踵を返す。

『ハろオ』

絶体絶命再び。

走馬灯まで見えて来るレベルのプレッシャーに、完全に砂になるドラルク。

バケモノはその姿を見て、ニヤニヤと笑いながらビニール袋を取り出した。

「ビニールでやるの!? 破けるよ絶対!!」

『安心しろ、防護魔法はかける』

「なんでそんなに私をサンドバッグにするのにガチなの!？」

『訳のわからんヤツに電化製品が如くこき使われた挙句、抗議したらこんなバケモノにされてムシヤクシヤしてるんだよ!!』

「八つ当たりじゃないか!!」

八つ当たりで素人が作ったサンドバッグにされる運命にささやかな抵抗をすべく、ドラルクはツツコミを入れる。

しかし、バケモノはそれを意に介さず、ドラルクの砂を掬い上げようとした。

『うるさい！お前にわかるか!!』

急に家が家族ごと爆発したり、なんか訳のわからんヤツにこき使われ、抗議した挙句変なバケモノにされる気持ちがい!!』

「なんか前半部分だけ共感できる気がする」

なんとという因果だろうか。

クソガキが巻き起こした騒動によって、家を失い、ロナルドの家に転がり込んだはいいが、家政婦生活を強いられたドラルク。

ある理由で家を失い、奴隷生活を強いられたバケモノ。

一方的ではあるが、ドラルクはバケモノに一種のシンパシーを感じた。

『おまけになんでか殺人犯呼ばわりされるし!! 無実を訴えようにも皆逃げてくし!!』

このやりようのない怒りを向けたくて、人間じゃないヤツ見つけてボコろうって思ったんだよ!!』

「どうしよう、なんか凄く可哀想に思えてきた……つて、無実?」
おかしい。

このバケモノが言うには、彼は誰も人を殺していない。

なのにも関わらず、この場に鉄臭い液体がぶち撒けられている。

「この血はなに？」

『ストレスで咯血したんだよ!!』

病院行っても追い返されるのがオチなんだよクソツタレ!!!』

「ああ、うん……」

血の主人はまさかのまさか、目の前のバケモノだった。

不憫すぎる運命に、ドラルクはサンドバッグにされかけているとい

うのに、憐憫の念を抱く。

「見つけたぞ」

その瞬間。

ドラルクたちの居た地面が爆発した。

すぐに興味を無くしたかのように視線を逸らした。

「君、マジで無罪だったのか……」

殺してそうな見た目で、ホラゲチツクに登場しといて」

『見た目は兎に角、気さくに話しかけようとしたら、声が上擦っちゃったんだよ!!』

まあ、そのおかげでお前が人外ってわかったけどな!!』

意外とドジっ子なのだろうか。

バイ○ハザ○ドに住んでそうな見た目のくせして、何処に向けた萌え要素なんだ。

ツツコミを入れようとしたが、ドラルクはあることに気づき、止める。

その視線の先には、ボソボソと何事かを呟くイカレ野郎の口があった。

「なんか呟いてる……?」

『詠唱だ、来るぞ!!』

バケモノが叱責するや否や、再び地面が炸裂した。

「ぐはあ!」

『ぐうっ……!』

受け身を取ったバケモノは、苦虫を噛み潰したような顔でイカレ野郎を睨みつける。

一方、ドラルクは音にビビって死に、すぐさま復活した。

「君、強そうなんだから反撃したらどうなんだ!? さっきからやられっぱなしだぞ!」

『あんなバケモンに勝てるか!!』

ドラ○エの魔物で言ったら、アイツがドルマ○スで、オレはト○ルだぞ!』

なんとも分かりにくい例えだ。

しかし、ドラルクは極度のゲーム脳。

それがどれだけ無謀なことか、彼は完全に理解し、絶望した。

「ウワアアアアアア100%死ぬウウウウウーッッッ!!!」

『お前はさつきから死んでるだろ!!』

「コントはそこまでにして、さつきと死んでもらおうか!!」

イカレ野郎が再び詠唱を始め、地面が赤く光り始める。

おそらく、先ほどよりも高威力なもの。

復活するドラルクは兎に角、バケモノにとっては絶体絶命のピンチ。

せめて詠唱の邪魔を出来ればよかったのだが、相手が空を飛んでる時点で詰み。

『クソオ……っ!』

バケモノが怒りを込め、地面を叩いた瞬間。

「私は殺生を見るのは嫌いなんだ」

声が響いた。

ただそれだけ。ぼんやりと光がイカレ野郎を覆うものの、詠唱が止まることはない。

詠唱も完成し、最早これまで。

バケモノは死を覚悟し、目を瞑る。

「ふははははは!!」

金髪幼女のヘソにしゃぶりつきたいイイイイイー……ツツツ!!!!」

聞きたくもない性癖が暴露されるまでは。

鬼のような形相で睨むも、怒号の内容が内容のため、全く怖くない。
音量が音量だったためか、ゾロゾロと見物人も集まり始める。

「なんだあれ？」

「へソ変態だ！」

「やーい！へソヘンターイ！」

「金髪幼女のへソが好きイイイイイイイイイイイイーイーイーイー
ツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツ
!!!!

尚も性癖拡散するイカレ野郎に、小学生が馬鹿にし始めた。

高等人民が着るような服、尚且つかかなりの悪人ヅラ。

そこから放たれる、ハイレベル過ぎる性癖。

馬鹿にされない訳がない。

いや、最早馬鹿にされるためだけに生まれてきたようなモノである。
る。

「へソオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!

『おじさん。こいつ普通に喋らせたら危ないから、一生このままにし

てくれる？』

「君、見た目とは別ベクトルでエゲツないこと考えるなあ」

『クソオ』と同じイントネーションでへソと叫ぶイカレ野郎。

彼に対して、相当怒りが溜まっていたのだろう。

バケモノの悪魔のような提案に、Y談おじさんは面白そうなモノを
見る目でイカレ野郎に目を向け、軽く頷いた。

説き伏せようにも数百年はかかるな、と一人呟き、サーゼクスは眉間を抑えた。

「そんなことより、この新聞を見てくださいよ!!」

「そんなことつて、主人殺しかけておいてよく言えるよね」

流石にドアが突き刺さった程度では死なないが、心臓に悪いのは確かだろう。

悪魔でも人間でも、ストレスで体を壊し、挙句死ぬというのはよく聞く話だ。

このメイド、クビにした方がいいのでは…?

そんなことを考えながら、サーゼクスは渡された新聞に目を通す。

『オータム新聞』…?聞いたことない新聞社だな」

「そつちじゃなくて、見出し!!」

「見出し…?」

サーゼクスは言われるがままに、新聞の見出し部分に目を向ける。

「……………は?」

そこには、大々的に『神々は実在した!?!衝撃!!人外だらけの社会!!』と書かれていた。

◆?◆?◆?◆?

世間は『人外』と呼ばれる存在を、いとも簡単に信じた。

ソレも無理はない。

ついこの間、『新横浜が入れ替わる』という怪奇現象が起きたばかりなのだ。

更に付け加えるなら、役所に勤める人間たちにより、『戸籍の数と人口が合わない』という問題が数年前から深刻化…。

トドメに『人間の記憶を弄るような存在も居る』ということが暴かれたことにも原因があった。

隠蔽しようにも、『オータム新聞社』の記者がアレやこれやと人外に

よる問題を暴いていく。

無論、人外らは血眼でその記者を殲滅しようとするも、全滅。

割り当てられた全ての人員に、海よりも深く、スター○オーズのダー○サイドよりも闇がタップリなトラウマが刻まれた。

社会問題にまで発展したソレを止める術は、人外たちには最早存在しなかった。

◆?◆?◆?◆?

「情報提供、ありがとうございます」

「いいいいいいつ、いえええええ、こここここのてて程度、なななんてこつとととないつすよよよよ!!」

ロナルドの事務所には、一人の来客が居た。

男にしてはサラリとした長髪。

眼鏡がより映える、知的な顔立ちにビジネススーツ。

そして、それら全てを台無しにする『バトルアックス』。

「……フクマさん、なんでここに居るの?」

「オータム社の社員は、新人研修時に時空転移の取得を強要されますので」

「ソレ出版社員の必須スキルじゃないよね絶対」

彼こそ、ロナルドたちの恐怖の象徴。

世界最強……いや、『最恐』であり『最凶』の出版社『オータム社』のエリート。

その名も『フクマ』である。

「この度、この世界に『オータム新聞社』を設立することになりました。そのデビュー記事として、いいネタになりました」

『お、お役に立てたなら、何より……』

先日の感謝を伝えるために訪れていたバケモノ：『鳥羽』は、フク

マの笑みに苦笑いを返す。

その視線は、どう考えてもフクマには似合わないバトルアックスに向けられていた。

『ねえ、この人何？めっちゃ物騒なんだけど…？』

「彼はフクマさん。ロナルド君の自伝、『ロナルドウオー戦記』の担当編集者だ」

『おっかしーなあ…？？俺、耳が遠くなったのかな？』

編集者って、あんな殺意MAXなバトルアックス持つてるモンだっけ…？？』

無論、違う。

鳥羽の常識は、何一つ間違ってる。

この新横浜があつた世界がおかしいのだ。

あの世界は、『編集者は何かしらの武術を嗜み、作家たちに圧力を掛けることに長けていなければならない』という常識がある。

『オータム社』は、まさにその最高峰と言っても過言ではない超大手。作家たちへの殺意なら、他の追隨を許さぬ程に武術に長けているのだ。

このことを全く知らなかったドラルクとロナルドは、過去に幾度となく痛い目を見ているが、それは別の話としておこう。

「ツツコミたいのはわかるが、我慢しろ。」

逆らえば、鳥羽君のミニ鳥羽君と永遠のお別れになるぞ」

『怖いこと言うなよ…。俺まで目エつけられたらどうなるかわかんないんだから……』

ちよつと想像してしまったのだろう。

2人は揃って内股になり、大事なモノを掌で抑えた。

「ロナルド君なんか、締め切り守らないせいで毎度女の子になりかけてるからな」

ドラルクが場を和ませようとしたのだろう。

ロナルドが毎度の如く締め切りを破るといふ話題に変えようとする

鳥羽は事務所にあるカレンダーを見て、小さく「あっ」と声を漏らした。

『……締め切り、今日だったんでしよう？』

謝って書いたらしいじゃないスか』

「鳥羽君。君はこの後どうなるか知らないから、そう言えるんだ」

ドラルクが言うや否や、フクマはバトルアックスを立てかける。

倒れないことを確認した後、事務所の戸を開け、あるモノを引きずってきた。

女神のような顔の銅像。

一見すれば、芸術品として評価されそうなソレだが、見世物とは違う用途がある。

「メイドンだ」

『は？』

「針はないが、パソコンはあるあのメイドンにブチ込まれて、書けるまですてこれない」

その名は『アイアンメイドン』。

処刑用具として使われ、今や『作家への仕置き道具』として、オータム社で愛用されている代物である。

パソコン以外何もない空間で、黙々と書かなければ永遠に出れない。

オータム社の編集長曰く、常人なら二十分で発狂するらしい。

『うっわ……。作家じゃなくてよかった……』

「テメエら他人事だと思いやがってエエエエエアアアアアアアアアア
メイドンは嫌だアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!」

ホラー映画のワンシーンのように、メイドンの中へと引き摺り込まれるロナルド。

「もはや鳴き声だな」

おじさんはそう小馬鹿にし、天井へと視線を向ける。
そこには、一つの監視カメラが備え付けられていた。

「世間は今ごろ、楽しいことになっていそうだな」